

加藤一雄「蘆刈」を読む

一

〔万延元年の春四月で、ちょうど井伊大老暗殺の直後〕に〔東海道を上った〕ことのある〔祖母〕の思い出から。

「ないない、ないない、何がない、彦根の殿さん首がない」と
後年祖母はこの穏やかならぬ唄を孫にうたって聞かせました。

（XII Ⅱ 初版 115 ページ）

と。この唄に近いのが、田辺尚雄『音楽粹史①』（日本出版協同株式会社・昭和二十八年九月五日）「桜田騒動とチヨボクレ節」に見つかった。

凡そ世の中、ない物尽し、多い中にも、今年のない物たんとない、上巳の大雪、めつたにない 桜田騒動、途方もない、そこでどうやら御首がない。それに少しも追手がいない。一人や二人

堀 部 功 夫

じゃ仕方がない。お首はどこへか失せてない、お駕籠もあつても釣手がない。一人や二人じゃ仕方がない。御番所どこでも留め手がない、茶屋小屋芝居行き手がない、唐人咄し丸でない、道中飛脚絶え間がない、伯耆の噂さも嘘でない。夫れで□□悪がない、讃岐の騒ぎは知り手がない、其外此節呼びてがない、常陸の宝蔵に宝がない、一体親父が人でない、薩摩の助太刀分らない、諸屋敷門に出入がない、夜中はさつぱり通りがない、町人金持ち気が気でない、老中□□見つともない、全体役人腰がない、是では世の中治まらない、それでも先々戦争がない、どうだか私は請合はない。

である（傍線引用者）。異文があつたのか、覚え違いが混入するのか、不明。ただかような唄のあつたことだけは確かになった。冒頭に掲げたのが加藤一雄の小説「蘆刈」の一節である。明治上方風物

誌としても貴重な作品であった。

「蘆刈」は、美術雑誌『三彩』の昭和四十七（一九七二）年四月一日刊二八六号から昭和五十（一九七五）年二月一日刊三二八号まで〔ただし二九〇・二九四・二九九・三〇〇・三〇五・三一〇・三一・三一四・三一七・三一九・三二一・三二三・三二五・三二六の各号は休〕に二十八回にわたり連載された。初出である。その後昭和五十一（一九七六）年二月二十八日、人文書院より単行本化された。初版本である。

初出本文にのみ、中島千波・小田切ようこ・佐々木裕久・館岡豊照・伊藤彬・香野ルミ子・本間千江子・野畑直子・中島嘉之・岡田哲弥・山本真也・松本文子・倉島重友・谷中武彦・金井美佐保・榊田隆一・竹内真理・小泉朝美・堀泰明・角井満夫による挿絵が添えられた。語り手は、主人公の一生を絵巻物に例えるから、画文共鳴をねらったものであろうか。

初版本時の改訂は多い。形式的なそれは、段落変更・読点付加・漢字とかなと交換・正誤・短歌二行書き↓三行書き・漢字同士の書き換え・かな同士の書き換え・（○）不使用。

内容的なそれとして一つ、初出本文、

祖母の希望を突きつめて行きますと、風の果てはありけり海
音で、かすかな地平線上に先生とお志乃ちゃんとの結婚の影が

加藤一雄「蘆刈」を読む

浮びでてまいります。困惑と悲痛と微量の甘美の交ったシヨックが先生の心の一隅を刺すものですから、先生はこれは考えないことにしているのです。（x回）
を、初版本で、

祖母の希望を突きつめて行きますと、かすかな地平線上にお志乃ちゃんを背おうて行く先生の姿が浮び上つてまいります。

「人の一生は重荷をおうて遠き道を行くがごとし」という東照権現の遺訓は、額になって野堂町小学校の控室にもかかつていました。この遺訓が果して先生の運命になるのでしょうか。

（89ページ）

と変えるのを挙げておこう。初出の〈先生〉と〈お志乃ちゃん〉とは許婚の関係だったのである。もう一つ、志乃の死期を、初出〈戦争中〉（V回）より初版〈終戦の後〉（42ページ）へ変更する。

〈お志乃ちゃん〉を初出〈先生より六ツ上の亥歳〉（II回）から初版〈先生より五ツ上の子年〉（15ページ）へ変えるが、いずれにせよ〈先生〉は明治三十八年乙巳の生れとなる。主人公の生年は作者加藤一雄のそれと一致する。〈浅利さん〉を、〈甲辰の生れ〉で〈先生より十幾つの年長者〉とする（二十一回＝初版177ページ）のは、誤り。明治三十七年甲辰では一つしか年長にならない。

小説の〈今〉が昭和四十七年であることは、〈一昨年の夏、千里

山の万博》(XI回＝初版91ページ)で決定できる。

主人公——京屋佐吉という大学の先生——の年立てを作製してみよう。初出の回・作中時代・(先生)の歳・描かれる出来事である。

回	時代	歳	記	事
II	M 38	1		大阪上寺町の京屋に生れる。父が夭折する。母不明。先生、祖母に育てられる。祖母が越前五分市の孤児・志乃を引きとる。志乃が井戸端でころび、頭がおかしくなってしまう。先生、町内の娘・イーヤンに背負われて育つ。大阪南で大火があった。志乃と猪飼野へ行く。
III	T 2	9		京屋の好学の風尚はそめ叔母に伝わる。そめ叔母の結婚相手・多田工学士が行方不明となる。多田工学士の兄・敬助さんが、京屋を訪ねる。志乃と野堂町小学生の先生、多田敬助と、馴染みの芸子・千賀鶴とに連れられ博物館へ行く。
IV	T 3	10		志乃と先生、多田敬助から宗教と感覚とに結びつく教育を受ける。
IX				志乃と先生、多田敬助から宗教と感覚とに結びつく教育を受ける。
VI	T 7	14		そめ叔母が嫁入り。京屋は祖母と先生と志乃とだけになる。
XI	T 13	20		先生、金沢の高等学校へ進学。朽木惣左衛門や古泉と友達になる。
XII				多田敬助が、中国へ赴任。
X				先生、福井県今立郡池田の朽木家を訪れ、姉の広野さんと会う。
XIII	S 10			祖母危篤で帰郷する。
XIV	30			祖母歿。先生、京都へ転居。美術工芸学校講師となる。

I	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	XVIII	XVII	XVI	XV
S 47			S 20											
67			40											

丹波屋という菓子屋の太一少年を教える。助手が金毘羅お幸。国画創作協会。日本画家・川村曼舟、入江波光と交誼をもつ。波光グループの一人を紙屋川に訪ねる。有職故実の講師・佐久間夏樹翁と同僚になる。フランス語講師の同僚・浅利晋一郎と親しくなる。志乃に野州高崎在の銀行頭取との縁談起る。金毘羅お幸、丹波屋太一たち、続々と招集され、帰らず。志乃、略血。先生、食料飲料品の買出しに悪戦する。先生、絵画専門学校の生徒たちを連れ滋賀県伊香郡で勤労作業。浅利さんが急死。志乃、書画の名品を描き始める。先生と志乃、吉田山へ登り、山河を眺める。志乃は余命幾許もない。大学の美学講師となった先生、丹後半島へ研究旅行に出る。

初版本帯に記された文章、

〔表〕 臆たけた薄倖の女主人公を中心に、流れゆくままに生きた上方人たちの心意気を、美しい風物・自然を織りこんで画いた風雅な物語〔裏〕「蘆刈」は美術史家の著者が大阪、金沢、京都などを背景に、明治末から終戦までの多難な時代に、空しさに徹して生きた上方人の生き様を、丹念に写し出した文明批評風の小説です。〔改行〕ここには、昔なつかしい上方の芸能、

風俗、習慣が心にくいほどの文章でいきいきと蘇り、読者を生夢幻の境に誘います。

は本作の巧みな簡約である。第一読者による感想であろうか。

同時代評・先行研究として、

○〔無署名〕「蘆刈」（一九七六年三月二十九日付『朝日新聞』）。

〈自我をともし終始道化仕立てにして虚実定かならぬ自伝ふうの小説で、底に人生無慚（むざん）の思いをテレ隠しにした「隠士諧譚（かいぎやく）の書」とでもいったらよかろうか。〉、

○富士正晴「おいしい小説」（昭和五十一年五月一日刊『文藝』）。

〈加藤一雄は学識古今東西にわたり、市井の生活のにおい、ぬくみに実に通じ、澄ましかえったいたずら心がはなはだ豊富なので、やはりうまい小説を、楽しみ楽しみ書いたなあという感銘を受けた〉、

○杉本秀太郎「一文明のなごりの色」（昭和五十一年五月二十四日

付『週刊読書人』。のち「加藤一雄『蘆刈』評」と題して『幻城』

〔筑摩書房・一九九六年七月二十五日〕所収）。〈この主人公は、眩惑的な、あるいは功をさせる教養というものを教養とは考えない。教養とは和気であり、ただもう「おっとりとした」ものだと彼は思っているようだ。そういう教養のありようを照れくさく思わざるを得ず、科（しな）をつくってでなくては自己の教養を他

に示し得ないような時代に、ひとりの明日なき教養人によって書かれた精神生態の臨床報告としてよむなら、『蘆刈』はまた格別のおもしろみを覚えさせる作品である。痛みとともにしか味わい得ないような愉悅によって、これは甚だしく目のつまった、緻密な小説として心に残るだろう〉、

○石田静子「私の読んだ本」（昭和五十二年六月一日刊『暮しの手帖』）、

○富士正晴「恍惚」（加藤一雄『京都書壇周辺』（用美社・一九八四年十月二十一日））、

○原章二「加藤一雄の墓」（筑摩書房・一九八七年八月三十日）、

○杉本秀太郎「西国記」（昭和六十二年十月一日刊『ちくま』）、

○山本善行「加藤一雄周辺」（二〇〇〇年五月二十日刊『sanus』）、

○宇田正「立つことやすき花の蔭」（平成十四年三月十九日刊、六

月十九日刊、平成十五年三月十九日刊『大阪春秋』）、
が、管見に入った。

山本善行は以後も『関西赤貧古本道』（新潮社・二〇〇四年二月二十日）や岡崎武志との共著『新・文学入門』（工作舎・二〇〇八年六月二十日）などで宣伝する。

二

〈近代日本文芸の世界で、大阪にゆかりをもつ『蘆刈』という題名の小説が、大文豪谷崎潤一郎の有名な作品のほかにもう一つ存在する。大阪出身の美術史家加藤一雄の筆のすざびともいいうべき一篇のロマンが、それである〉と宇田正は書いた。

一雄「蘆刈」は石田静子が記すように、〈物語というより著者の自画像である〉。原章二が〈モデルなしの全くのフィクションである〉(144ページ)と見ぬくヒロイン志乃でさえ、部分的にはモデルがあったかも知れない。一雄が本作以前に発表した「京都画壇周辺帖7」(昭和三十九年九月一日刊『日本美術工藝』)に出てくる〈農人町の灰屋十兵衛〉の〈妹のいとさん〉である。上段に〈灰十のおいと〉、下段に〈お志乃ちゃん〉を並べる。

ある春の曇った午後、私はい
とさんと連れられて「略」猪
飼野の方へげんげを摘みに行
ったことがある。「略」いと
さんは、さかしくも傍の畑で
働いている百姓に帰り路を尋

先生はお志乃ちゃんに連れら
れて猪飼野へげんげ摘みにま
いりました。「略」先生らは
上本町の方へ帰ろうとし、近
くの畑で働いていた百姓のお
っさんに道を尋ねました。そ

ねた。「略」百姓は鋤をかざ
してこの町家の娘に路を教え
ていた。しかし私らはまたま
た溝と畦との網目の中に踏み
迷い、さすがに暮れなずむ春
の日も漸くぼんやりとした夕
靄をたれ始めて来た。その時、
突然私はハッと気がついて、
いとさんの顔を振り仰ぎなが
ら云ったものである、「今の
おっさん、あれ、狸と違うや
るか?」。いとさんは静かに
立ち止まり、その美しい面上
にはみるみる沈思と憂いの翳
が覆い始めた。

の頬冠りをしたおっさん、ま
さに絵にかいたようなポーズ
で鋤をあげ、産湯稲荷の方向
をさしてくれました「略」行
けども行けども畦道や小溝は
蜘蛛手に乱れ、いつまでたっ
ても産湯の杜は見えませぬ。
そのうちにさすがに永い春の
日もようよう傾きまして、
「略」その時電光のように先
生の脳裏に閃いた考えがあり
ます。「略」「アノー、さっき
の百姓のおっさんあれ狸の化
けたんとちがうやろうか。」
すると、先生の仰ぎ見ている
お志乃ちゃんの顔、いつも平
穩に澄んでいる顔が、「略」
忽ちサーッと曇りました。

(II)

「京都画壇周辺帖」に拠れば、(これから四年の後この灰十のおいとはお家騒動の渦中に身を投じ、それが終るや否や、あたかも急ぐ用事があるかの如く忽々としてこの世を辞して行った)という。これももし明治三十五年頃の出来事ならイエローペーパー『大阪朝報』があつて、『大阪朝日新聞』や『大阪毎日新聞』の伝えぬ富豪のお家騒動を好んで取上げたけれども、大正初期大阪のそれを知らない。ために、(灰十)のお家騒動について知るてがかりが無い。さらに「京都画壇周辺帖」のこの箇所自体が創作ないし一雄「蘆刈」の習作であつた可能性も皆無と言えず、探索は八幡の藪知らずへ入り込んでしまうので引き返すとしてしよう。

志乃の存在があらましフィクションとしても、本作が(彼の半生の生活に関わりを持った人々を克明に浮彫りし、それに明治、大正、昭和初期にかけての大阪京都などの風物習慣を織り交ぜた一大曼陀羅である)(石田静子) 概略は動かない。

宇田正は、一雄「蘆刈」の(もつばらその前半を占める大阪時代の記述の中から「略」古き良き大阪の町々のノスタルジックなたたずまいを活写した部分を探)つたエッセイである。いわく、作中の(曼陀羅院(Ⅱ回Ⅱ初版13ページ)は(曼奈羅院)が正しく、その(跡地がおそらくいまの大阪市立生魂幼稚園の用地であると推定される)とか、作中の(烏ヶ辻の高等商学を出まして、現在は伯備紡

績の役職(初版(重役))をしており、兼ねて、大阪財界には名高いクラブ齊交会の幹事をしており)(Ⅶ回Ⅱ初版64ページ)を、(现实的に言いかえると、大阪商人クラスの最高学府たる市立高等商業学校(現、大阪市立大学商学部)を卒業して倉敷紡績(現、クラボウ)に入つて重役にまでなりクラブ清交社の幹事を勤める)となるよし。これらは宇田の注釈に従う。

宇田の言及しなかつた、明治大阪風俗誌として見逃せない箇所が未だある。それを引用し贅注を附しておく。

「エビスさんが鯛つった、鯛つった」という見世物をイーヤンはいつも見せてくれました。大きなエビスさまの面をつけて、ベレーをかぶり、鯛のかかつた釣竿を肩にかけ、何のつもりなのですか、腰のまわりに、張子の馬をまといつけて、その「鯛つった、鯛つった」を唄い乍らぐるぐる廻るのです。見物料は五厘でしたが、イーヤンは毎度この出費を惜しまなかつたところを見ますと、何かあれにも然るべき値うちはあつたのだろうと思います。しかし、先生の知る限りにおきましては、完全な無意味と、これまた完全な弛緩とが、人を深い眠りに誘うだけのことでありました。(Ⅴ回Ⅱ初版43ページ)

私見によれば、この(エビスさんが鯛つった、鯛つった)という見世物)は天王寺の蛸々の最後部分である。蛸々は将門眼鏡の見

料で稼ぐ大道見世物であった。前田勇『上方演芸辞典』（東京堂出版・昭和四十一年七月十日）の「蛸々踊り」項が概略を示す。元形は将門眼鏡の見料で稼ぐ鉛売り——将門眼鏡はオランダ渡来、多面カットのレンズを羽子板状木枠にはめ込んだもので、レンズを透して見ると一の対象が多数に増えて見える。将門眼鏡は落語に採り入れられ、春風亭柳朝「眼鏡屋泥棒」を『評判落語全集巻中』（大日本雄弁会講談社・昭和八年八月八日）で読める。伝来は今井湊「鞘絵と将門眼鏡」（昭和四十三年五月二十五日刊『蘭学資料研究会研究報告』）に詳しい。商売姿態は戸田皓画『しん版車づくし』（伊勢勝・明治十七年九月）中に描かれた。渡部乙羽「江戸市中世渡り種」（明治二十五年九月十日刊『風俗画報』）に掲げる（鉛うり腰付馬）、うきよ「江戸市中世渡り種」（明治三十年九月十日刊『風俗画報』）に掲げる（八角目鏡）、菊地貴一郎『府内絵本風俗往来』（東陽堂支店・明治三十八年十二月二十五日）に掲げる（唐人鉛ホニロ）——である。

天王寺の蛸々を調べまとめた単行書として、岸本彩里重人『天王寺の蛸く眼鏡』（子寿里庫、昭和十二年五月八日）がある。同書に拠ると、明治初年、阪田清吉が元祖。船木嘉吉（万延元年生れ）の一座が跡を引き継いだ。彼岸時、天王寺の東門付近で、「とうさん、ぼんさん、眼鏡をお目々にしっかりとつけて、ハイヨウ蛸じゃい

な蛸じゃいな」ト人を集める。三銭で将門眼鏡を貸す。張りぼての大蛸を頭から被った二人の座員、松本利吉・西川亀吉が身振りおかしく踊り出す。下座は船木かねの担当。次は、馬の首と尻状の張子を腰に結びつけた二人が、駆けまわり、刀で渡り合う。最後は「めでたいなく」。張りぼての恵比寿頭を被り、鯛を片手に廻る。「これで三銭の泣き別れ」ト将門眼鏡を回収する。毎回二百円前後の収益があった、という。この見世物を挿絵付きで活写した小出権重の随筆「春の彼岸とたこめがね」（昭和二年四月一日刊『大阪朝日新聞』）が有名である。小出が、

私は、今になほ彼岸といへばこの蛸めがねを考へる。矢張り相変らず彼岸となれば天王寺の境内へ現はれてゐるものかどうか、それともあの蛸も大将も死んで了つて息子の代となつてゐはしないか、或は息子はあんな馬鹿な真似は嫌だといつて相続をしなかつたらうか、或は現代の子供はそんなものを相手にしないので自滅して了つたのではないかと思ふ。何にしても忘れられない見世物である。

と結んでからもなお十余年後まで、この見世物は生き延びた。穂村正治・牧村史陽編『大阪弁』第二集（清文堂書店・昭和二十六年八月一日）が、表紙に蛸く眼鏡を描き（山口艸平絵）、十五ページ解説に（皆空襲で焼けてしまつて、その後復活の望みはない）と記

した。戦後は存在しない。一柳安次郎「天王寺の思出」（昭和六年三月一日刊『上方』）が蜻／＼眼鏡を（理智に聴くなつた今の子供

には、馬鹿々々しからうが、還暦に近い昔の子供には、どうしてもあこがれの種である）と回想する。宮本又次も（彼岸の中日）には天王寺へ参り、（蜻たこ眼鏡）を見せてもらった。「タコタアコ」と変な身振りのおどり、これを六角形の硝子の目鏡で見せてもらった。そのあとで恵比寿の鯛釣り、軍人の戦争ごとをして見せた。張りばての馬、銀紙張りの竹刀をかざし、腹と背中に同じ張りボテの馬の首と尻をつけて駆けまわった。同じ扮装の一人が追いかけて、戦争の真似事をした。これを六角形の硝子目鏡、万華鏡で見る。二六、一二で、一二人の姿が走りまわるように見えた」と回想する（『上方の研究第一巻』（清文堂出版・昭和四十七年十一月二十日））。本作に戻る。おそらくお金を出したイーヤンが将門眼鏡を独占し、先生はそれを貸してもらえなかったたのである。眼鏡無しで見る（エビスさんが鯛つた）は何の面白味もない見世物である。将門眼鏡による大衆的興奮を享楽出来なかつた先生は、代りに眼鏡に囚われぬ見方を得た。先生は、「京都の自然と芸術 黒谷墓地（上）」の語を借りれば（阿呆な騒ぎからエスケープ）し続ける。

三

創作のヒントを先行作品に探る。

石田静子が（蘆刈という題名に惹かれてつい読み始めた。同名の謡曲もあり、何かロマン的なものも連想されたのであるが、果してそれはロマンの香り紛々たる夢のような物語だった。（略）蘆の浪速に住んだ作者は、自分をしおれた蘆にたとえている箇所もあり、また一農僕が「蘆刈」を舞う場面もあつて題名の由来も床しく、今は故郷を遠く離れて住む私には、何から何まで無性になつかしい一書だった」と書き、謡曲「蘆刈」を想定するようであるけれども、そう簡単ではない。本文に、作者の（自分をしおれた蘆にたとえている箇所）は無く、有るのは自分を（しをれ）た（真菰）にたとえている箇所（I回II初版3ページ）であり、（一農僕が「蘆刈」を舞う場面）も無く、有るのは朽木家の下男が（蘆の葉の笛をふき……）という一句がある（何か能らしきものを一サシ舞）う場面（XII回II初版106ページ）で、この一句は「猩々」が出所である。謡曲「蘆刈」ヒント説を斥けよう。

いよいよ『朝日新聞』の書評や宇田正が前振りした、谷崎潤一郎「蘆刈」（昭和七年十一月一日刊および十二月一日刊『改造』）↓「自筆本蘆刈」（創元社・昭和八年四月）↓『春琴抄』（創元社・昭和八

年十二月十日)と対決しなければならなくなった。

本作について最も優れた先行研究である原章二が両作の繋がりを追求した。「狐と近代」章で原はまず、永井荷風と谷崎潤一郎^③との作中登場人物における狐のしるしを確認する。次に一雄の全著作から、「野火」^④の狐・「無名の南画家」の〈化け〉る・「池大雅」の狐を概観する。そのうえで原は、本作志乃が〈浄楽寺の狐に履物をとられ〉た挿話(X回⇨初版87ページ)から彼女が〈狐に嫁入りした〉と読む。

一雄の『蘆刈』が潤一郎の『蘆刈』を意識していないはずはない。それは書き出しの一行——「先生の名は京屋佐吉と申しまして、打ちつづく乱世に恐れをなし、京阪沿線の片隅に逼迫して細々と暮しておりました」という語りにもう十二分にあきらかだろう。そして、ぼくは、一雄がどこまでそれを自覚していたかは知らないが、ともかく事実において、一雄の『蘆刈』は潤一郎の『蘆刈』に対する強力なアンチテーゼであり批判になっていると思う。潤一郎の『蘆刈』では物語が完結する。(略)だが一雄の『蘆刈』は成就ということからもっとも遠い。その話は、構築されつつ解体される。

と説く。杉本秀太郎「西国記」が〈原君の『加藤一雄の墓』は、殊に「狐と近代」の一章など、これは狐が書いたのではないかと怪し

い胸さわぎをおぼえるくらいに面白い〉と絶賛した通り、鮮やかな論である。

蛇足ながら、志乃が〈おもむろに先生の方を振り返り、少し照れた狐みたいな微笑を浮べる(28回⇨238ページ)場面もあった。

名詮自称も強調したい。志乃はもちろん信太狐である。

本作と潤一郎「蘆刈」とを重ねる理由をさらに一つ加えるならば、ヒロインが〈臆たけた〉と表現されることである。

周知のように、谷崎「蘆刈」のヒロインは〈むかしの物の本に「蘭たけた」といふ言葉がある〉のを借りて語られる。^⑤

一雄「蘆刈」でもヒロインが、

〔そめ〕叔母の眼から見ますとお志乃ちゃんも、「えろう臆たけた」そうであります。「臆たけた」とはこの場合、空しく老いて空しく美しい、という嗟嘆の響を秘めております。(XIV回⇨初版117ページ)

と表現される。

潤一郎も一雄も本歌取りを駆使した。

潤一郎「蘆刈」は、塩崎文雄「『蘆刈』余影」(一九九二年十二月十日刊「日本文学」)に拠れば〈物語が記述されている時点(昭和七年)・蘆間から現れた男が物語を物語る時点(昭和四年)・物語の内的時間(それは父が男に語って聞かせる語り)と、男の語りとの二

重構造になっている)〔明治期〕の四重構造になっている)が、最奥の芦橋慎之助の語る部分に集中して、『大和物語』百四十八段を取り入れている。

一雄も早くから『大和物語』に関心を持った可能性がある。

原の紹介した一雄高校時代の著作「四つのお話」最初「野火」を振り返る。起承転結構成を附すと、梗概は、

〔起〕 敬助が(今別れて来た奥様)の襟巻を思い出し、動物屋で狐を買って帰る。

〔承〕 (細君) から苦情が出て、狐は丘に放たれる。

〔転〕 丘に野火のたつを見て、(細君) が(狐は焼くはしないでせうか?) と心配する。

〔結〕 (焼ける) 狐なんか焼け死んで了(へ) と敬助は(こころの中) で悦しげに) 叫ぶ。

という短編小説であった。

私は「野火」から、古典の歌徳譚を連想する。それは、

〔起〕 結婚している男が新しい女に惹かれる。

〔承〕 男が元の女の許へ帰り、また出かける。

〔転〕 元の女が(風吹けばおきつし)らなみたつた山よはにや君がひとり越ゆらむ) と心配する。

〔結〕 男の心は元の女に戻って治まる。

加藤一雄「蘆刈」を読む

との話であった。『古今集』雑下・『伊勢物語』二十三段・『大和物語』百四十九段等に見える。「野火」はこれらの本歌取りであろう。

四

では、『大和物語』百四十八段と、潤一郎「蘆刈」慎之助・お遊の話と、一雄「蘆刈」の関係を追ってみよう。

(1) 愛し合う男女の pair がいた。

〔大和物語〕(津の国の難波のわたりに) (あひしりてとしごろありける) 夫婦がいた。

〔潤一郎〕 芦橋慎之助は小曾部静を娶りつつ、二人して静の姉・お遊様に仕える。慎之助とお遊様とは実事があってもおかしくない関係にある。

〔一雄〕 先生は幼時から、(祖父の方の遠縁で) (頭がおかしくな) った、年上のお姫様お志乃ちゃんと一緒に育つ。

(2) 男は、自分のことより相手の女を幸せにしたいと願望する。

〔大和物語〕 男が(をのれは)とてもかくても経なむ。女のかく若きほどにかくであるなむ、いといとおしき。京にのほりて宮仕へをせよ) と送り出す。

神田秀夫『古典一週』上(明治書院・昭和三十六年五月五日)は(若い妻を美しくしておきたいと思うと、国経の大納言のように自

分を疎外して考えてしまつて後で悔む型に属)する男と要約した。

潤一郎 後年「少将滋幹の母」に国経を描く谷崎は、同型に属す芹橋慎之助を描いた。

慎之助は〈巨椋の池の御殿とやらへ行つてきらびやかな襖や屏風のおくふかいあたりに住んでください〉とお遊に説得する。

一雄 志乃は京屋で〈艶麗したたるばかりのお姫さま〉と扱われ(Ⅶ回Ⅱ初版57ページ)、先生もそのように対応した。(野州高崎近在の、炭屋ではない、銀行の頭取さん)との縁談を取り次ぐ。

自力では女の栄耀栄華を實現させられない男が、女の出発を祝福する。このテーマは一雄に親しく、皮肉な口調ながらの温かい応援を、高校時代の戯曲「ぶらんこ」(幼馴染の敬助・康吉・みづ子が幼時やつたように、丘上でぶらんこ遊びをする。みづ子は近日結婚して仏蘭西へ行くらしい)や、「沼」(事業に失敗し競馬に通う父、大学の化学研究で失明した次兄・俊一、沼に沈んで行く様)な家で、妹・正子は東京へ嫁に行くことを望む。父も俊一も皮肉な反応しか示さない。正子の大好きだった亡長兄は、正子を抱き上げて海を見せたという。俊一も正子を高く抱き上げる)でも描いていた。

(3)女は、栄耀栄華な生活に入る。

天和物語 〈この宮仕へするところの北の方亡せたまうて、[略]この人をおもふたまひけり。おもひつきて妻になりにけり。思ふこと

もなくめでたげにてゐた)り。

潤一郎 お遊は、(金にあかしたくらし)に入る。

一雄 志乃は(向うへ行つたら下にも置かぬ奥方さままで、お志乃ちゃん唯チーンと坐つてただけでええの。こういうでは何とすけど、京屋にいるよりはあの人もずっと幸せ)(22回Ⅱ初版193ページ)になる——はずであった、しかし、志乃は、行くと決断した直後に略血。実現は先送りされる。

(4)男は微禄する。

天和物語 (蘆になひたる男のかたひのやうなる姿)。

潤一郎 慎之助たちは(ろうぢのおくのおくの長屋にすむようなおちぶれかたをしてをりました)。

一雄 (京阪沿線の片隅に逼迫して細々と暮しておりました)(1回Ⅱ初版3ページ)。

(5)男は女を垣間見する。

天和物語 (下簾のはさまのあきたるより、この男もれば、わが妻に似たり、あやしさに心をとめてみる)。

潤一郎 慎之助は(生垣のすこしまばらになつてゐる隙間から中をのぞいて、どういふわけか身うごきもせず、そのまゝ、そこをはなれないものでござりますから、わたくしも葉と葉のあひだへ顔をあて、のぞいてみました)。

〔雄〕「該当なし」。

(6) 和歌。

〔大和物語〕 男、(君なくてあしかりけりとおもふにもいと、難波の浦ぞすみうき)と詠む。

〔潤一郎〕(君なくてあしかりけりと思ふにも いと、難波のうらはすみうき)。

〔雄〕〈新古今集は経信卿の歌——〔改行〕みしま江の 入江の真菰〔改行〕雨ふれば〔改行〕いとどしをれて 刈る人もなし〔改行〕の風情でありました〉(一回〓初版3ページ)。

生活力の乏しい蘆刈男もたくみな歌を詠むが、先生も百花繚乱の文体を駆使して夢幻の世を伝える。

次に一雄「蘆刈」の谷崎離れを窺う。

第一、お静やその子に当る人物が登場しない。

岡崎義恵はお静の(献身には何か性的なものや病的な動機がこもっていることを感知する。〔略〕少し人倫を超えた被虐性の潜在を感ぜしめる)。慎之助についても同様。(お遊さまは我儘に育つたというだけでなく、多少嗜虐性の傾向があつたらしく推測される)と、潤一郎「蘆刈」に(変態性の存在を指摘)した。

先生は、異常性欲どころか性的関心さえ露にしない。先生は独身を通す。

「京都画壇周辺帖」に登場する(細君)(家の子供ら)を本作は捨象する。一雄が(浅利さん)モデルの、独身だった河野通一から影響を受けた一面であろう。

第二、先生の職場縁の人物が登場する。

昭和十年代、先生の周辺の夥しい死が描かれる。(まあ何という荒涼無慚の世間なのでございましょう)(VI回、初版50ページでは(世間)を(近代日本)と改訂)の語が響く。

第三、お遊の栄華は無く、志乃の空しい生涯を描く。

〈古今集の序に引きます歌——〔改行〕難波津にさくやこの花〔改行〕冬こもり〔改行〕今を春辺とさくやこの花〔改行〕という歌は、〔略〕お志乃ちゃんという一個の大坂娘の「今を春辺とさく」姿を髣髴させているような気がして仕方ありません。(IX回〓初版75ページ)〉。この歌の(花)は梅の花だが、一般に(花)は平安朝以後、換喩で桜と習った。晩年の志乃は、円山公園しだけ桜と運命を共にする。志乃の死期を、初出の(戦争中)から戦後へずらすのも、これに伴う措置だろう。

桃ちゃんもお志乃ちゃんも、哀れ、あくる昭和二十一年の円山の桜はもう見ることができませんでした。(略)思えば、明治維新にこの世に出てきて、その維新体制が崩壊し、思いもかけぬ夷狄の占領下に、この名木は静かに枯死して行く運命であり

ました。(27回＝初版230～231ページ)

という次第。

第四、深遠な哲理を愉しく分り易く伝える。

本作の基底にも、

〔生家近くの〕曼陀羅院を初めとします墓場の影響は、もっと哲学的でありまして、深刻に永続的に先生の魂に浸透致しました。この世で死者の数は生者の数よりも多い、というフランスの哲学者の原理を先生欣然として受入れておりますのは、一にもってこの浸透のなす業なのであります。(VI回＝54ページ)

との感慨があった。(フランスの哲学者)はオーギュスト・コント、^⑧ 出典は『実証政治学体系』(『Humanité se compose de plus de morts que de vivants』)〔清水幾太郎『オーギュスト・コント』(岩波書店・一九七八年九月十日)194ページより孫引き〕であらう。

清水は(人類は、生者よりも死者によって成り立つ)と訳す。ちなみに、同文の別訳らしきもの、(人類が生者以上に死者に作られてゐる)(石川三四郎)、(人間は生者よりもより多く死者より成る)(本田喜代治)を瞥見した。箴言としては一雄「蘆刈」の訳が最も巧みで、聞きかじりのChesteron(「死せる者のデモクラシー」(山之内一郎訳)へ)と思念は発展する。

ところで、お志乃ちゃんの求婚者は(野州高崎近在の、炭屋)では

ない、銀行の頭取さん(22回＝初版193ページ。傍線引用者)だが、(炭屋)とは誰なりや。民俗学者なら炭焼小五郎でないかと言ひ、国文学者なら塩原多助でないかと言ふ——であらう。ないない、ないない、何がなひ、「蘆刈」謎解き切りがない。

注

① 初回数表示が、初出は十八回まで(へ)内にローマ数字、十九回から二十八回までは(へ)内にアラビア数字で示される。

② 私は、二〇〇六(平成十八)年七月下旬・京都高島屋での催し「いま・むかしおもちゃ大博覧会——入江正彦児童文化史コレクション——」で、(将門眼鏡)をガラス戸越しながら実見した。いまだ田敏捷編『おもちゃ博物館17子供乗物・光学玩具』(京都書院・一九九二年六月十日)に将門眼鏡種々および(19面カットのタコタコめがねで見る)画像の写真(亀村俊二撮影)が載り、兵庫県歴史博物館編『図説いま・むかしおもちゃ大博覧会』(河出書房新社・二〇〇四年五月三十日)にも、(将門眼鏡)および7面カットの眼鏡で見る画像が載って、誰でも追体験出来る。まことに無邪気で他愛ない玩具である。

③ 谷崎と狐は周知のとおり。三島由紀夫も昭和十八年一月二十四日付・東文彦宛書簡に(狐の美感といふか、「狐」をとりまく美の世界とその文学に私はかねて関心をもつてゐますので、自由に本を出版できる地位になつたら「狐」といふ名の古今の典籍を編集した書物を出すのが、目下の夢です。「お伽草子」「俳文」「浄瑠璃」「近世歌謡」「谷崎の吉野葛」そこに招かれるのはかういふもの、断片でありませう。狐は谷崎氏のはれるやうに日本の永遠女性の一人ですな)と記していた。

④ 第四高等学校『北辰会雑誌』の「一雄著作は、原によって紹介された。

（一雄の在学中には大正十三年七月五日〔十五日が正しい〕発行の第百号から、昭和二年三月三日の第百八号までの計九号が発行されている。

そして実際に一雄の作品あるいは編集後記の類が見出されるのは、百号における詩二篇、しばらくとんで百五号における戯曲一篇、百六号における短篇小説と『編輯の後に』、百七号における『六号雑記』、そして百八号における戯曲および『六号雑記』、それですべてである」と報じる。実際は上記のほか、百二号に短歌、百三号に詩一篇、百五号に詩二篇、百七号に詩一篇を加えることができる。

⑤ この〈蘭たけた〉という語について、岡崎義恵『近代日本の小説』（宝文館・昭和三十四年六月二十日）の出した疑問、〈この語を谷崎は三回も反復しているが、「蘭たけた」とは実に不思議な語である。一体「上臈」とか「らうたし」とかいう語は「大言海」にも「大日本国語辞典」にも出て居り、「らうたげ」とかいう語もあるが、「蘭たけた」などという語は見えないのである。上臈らしく見えるという意味で「臈長く」という語が一般に用いられているやうであるが、私はまだたしかな出典を明らかにしない。「蘭」という字を「らう」とよむなどということは変なことである。谷崎は物の本にあるというから、江戸の戯作者でも使っているのであろうか。あるいは「臈蘭けた」の「蘭」の連想で「蘭」に転訛したのではないかと思うが、私にはわからない使い方である。この「蘭たけた」という標語が、お遊さま及びこの作の象徴のように感じられ、「蘭」という漢字の美しさもそれを助けているらしいが、日本語としていかがわしいもので、この作の古典的気分を殺ぐもののように思われるのは、私だけであろうか。を谷崎研究者がどう解決したかも、寡聞にして知らない。現在、『日本国語大辞典』は、「らうたけたる臈蘭・臈長」で立項する。「好色一代女」（臈蘭て）注で、佐藤鶴吉が（今日、

加藤一雄「蘆刈」を読む

皇族画報などの説明に、「らうたけき御姿」などいふのは、形容詞の「らうたし」とこの「らうたく」との活用を混淆した誤で、言語学上いはゆる錯雑現象でせう」と書いていた（昭和三年八月十五日刊『慧星』）。私はまだ皇族画報などの説明に辿りつかないけれども、今その点は措く。

⑥ 類話掲載の古典が多い。原田敦子『大和物語』蘆刈章段の形成（古代中世文学論考刊行会編『古代中世文学論考第10集』（新典社・平成十五年十一月七日）に学べば、歌は『拾遺抄』・『拾遺集』・『拾遺和歌集』、説話は『神道集』『今昔物語』卷三十の五ほか、源泉・影響を探ればさらに拡がる。谷崎『自筆本 蘆刈』の北野恒富口絵は「大和物語蘆刈図」であり、『大和物語』で話を進める。

⑦ 本作の円山公園しだけ桜に関する記述は、田中緑紅『明治文化と明石博高翁』（明石博高翁顕彰会・昭和十七年六月二十日）を、下敷きに書かれたものであることに気付いた。

⑧ 『京都画壇周辺帖8』（昭和三十九年十一月一日刊『日本美術工藝』）に「オーギュスト・コントがいったのだそうだが、「この世には、なんと死者の数が多いいことか」とある。

正誤 旧稿「加藤一雄「無名の南画家」を読む」（二〇〇八年十二月二十五日刊『佛敎大学総合研究所紀要別冊』）に、原章二以外へまとまった作品研究が存在しない」と書き、多田道太郎「加藤一雄「無名の南画家」」（一九八八年一月四日）日本小説をよむ会第三一九回報告レジュメ。↓荒井とよみ・山田稔編刊『日本小説を読む（下）』（一九九六年八月一日）所収に拠る。・千葉俊二「無名の南画家」（初出『一九九四年八月刊『テクネ』』、未見、『物語のモラル』（青蛙房・平成二十四年十一月三十日）所収）を見落とした。失礼をお詫びして訂正する。